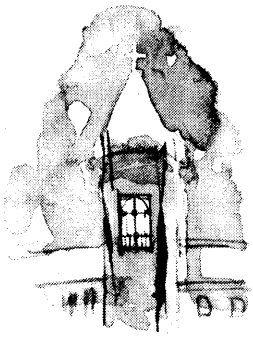
ローマへの道



河井　多喜子

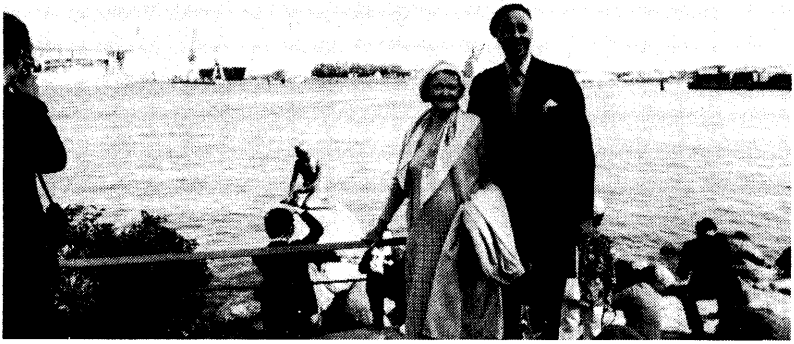
幼稚園とは？
教育とは？
教育の心は？
人間が生きるということは？

井の中の蛙が、大空を、大海を、求めて求めて、はい出して欧州教育事情視察の旅に出ました。子どもたちが遊んでいる姿を見たい、できれば一緒に遊んで、何かを感じ何かをつかみたいと思いました。

最初に降り立ったデンマークのコペンハーゲンでは、人魚の像付近の美しいプロムナードを散歩する老御夫妻の姿がとても印象的でした。腕を組み、ささえ合い、いたわり合って静かに歩く仲の良い姿に目頭を熱くし、車椅子の人も、ゆうゆうと夕方の散歩を楽しむ姿に、心なごむ思いがしました。

白夜のチボリ公園では、マロニエの木蔭のベンチに、ゆったりと腰をおろして、花を眺め音楽を聴く人々の優雅な姿をみて、心たのしくなるひとときもありました。こちらも、あくせくしないでやりましょうと思いました。

次の日に見学した幼稚園も、のんびりと楽しそうな園でした。



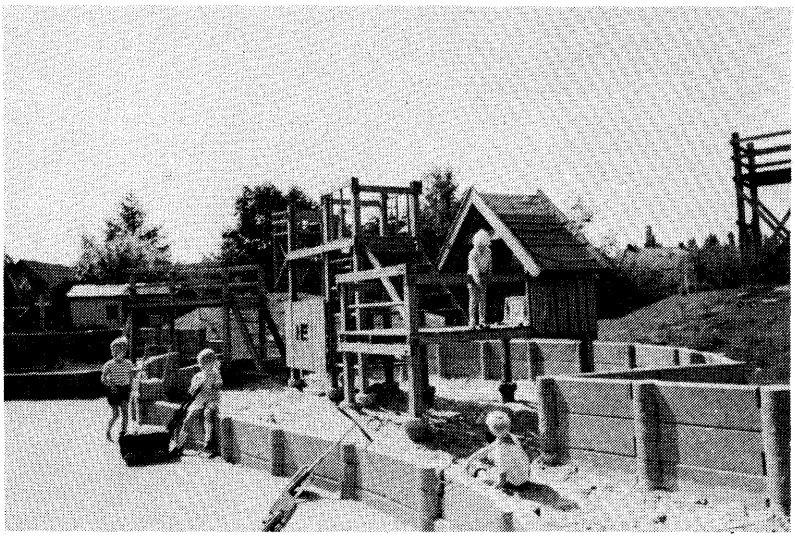
人魚像と老夫婦

広い庭では、園児がペンキ塗りをしたりプール遊びなどをしています。ビニールプールで跳びはねる子どもと手をとり合って、一緒にはねて遊びました。

庭のすみには山羊さんの小屋があり、続く塀には絵が描かれていて、そのむこうに青空がひろがり、楽しさがいっぱいです。

保育の形態は自由で、園舎も、園庭も、子どもの活躍の場です。はだかんぼが跳び回っています。

こんな光景もありました。実は、不審の思いと申しましょうか、ドキッとしたと申しましょうか、保育室の一隅で園児がマッチ売りをしているのです。小型マッチの片面は、子どもたちが描いた絵です。参観者に買ってもらう場合でも、お金を扱うことまで、子どもの仕事なのです。本物の大きなプールが欲しいのだそうです。自分たちの発想で、計画し実行する行動力の確かさには驚ろきました。私の感覚では資金カンパのために園児が直接お金を扱う等ということは危険なこと、大人のメンツにかかわることなどと考えて、きれいごとですませがちですが、目標を達成するためには自分たちで考え、自分たちの手や足で行動していくことの大切さと、甘えのない本物の生き方を感じました。



コペンハーゲン公立幼稚園で

フランスのある幼稚園ではこんなことがありました。コンクリートの園庭の一部に砂場があり、子どもたちが遊んでいます。コンクリートの方にも砂がちらかっています。これもなかなかおもしろいと思いました。そのあと、参観者はみんな部屋の中へ入り、教育委員会の先生と園長先生をかこんでお話を聞きました。その話の中で気になりましたのは、泥んこにならないように、服などをよごさないように、園庭はコンクリートにし、砂場から子どもたちが出した砂は一週間に一度、先生方がきれいに掃き寄せて砂場へ入れるという言葉なのです。砂がちらかっているのでホッとしていた私は、少し驚いて質問しました。

「私どもの園では子どもたちは、砂・泥・水で大きな山やダムを作り、水を流し、自分自身も泥んこになって遊ぶのです。そんな光景をご覧になったら、さぞ野蛮だとお思いになるでしょうね」と。

教育委員会の先生は、身近にあった粘土の動物を両手でそっと持ち上げて目の前に見せて下さいました。

「ノーノー、このような物も作りますが、子どもが全精力を打込むのは、もっとダイナミックなもの、大きな山、トンネル、流れ、ダム、時には砂場を含めて庭の一方の面

フランス　コンクリートの園庭

がそっくりダム工事現場になるようなものです」

と申しましたら、そばで静かに聞いていらっしゃった若い女性の園長先生は、

「やりたいけれど、残念ながら設備がないのでしておりません」

とおっしゃいました。なんだかさびしくなり、この点は日本の幼稚園はすばらしいと思いました。

小学校・中学校を参観した時の新鮮な感動もお伝えしたいと思います。

まず、はだかで元気に遊んでいる生徒が目に入りました。平家建校舎と広い庭はのびのびとした感じですし、勉強は学年別ではなく、縦わりのオープンプランで行なわれ、興味に応じ、一年生も三年生も同じ文学の勉強をするとか、算数の勉強も、生徒はグループで楽しく発言し合い、先生は時々静かに話すというふうです。プールの設備もとともい、プールわきの部屋では女生徒が先生に人工呼吸法の指導を受けておりました。

学校生活といえども社会の一部で、子どもも社会の一員として、真剣に生きているのだという感じを受けます。わ

からないことを自分で探し、真に求めるものは何なのかを自分で探して生きているように感じました。先生も、その中の一員として横のつながりとして子どもたちに接しておられるような、あたたかいものが伝わってきます。

庭では、塀や石に絵を描いたり、石を刻んで、何か一心に製作中の生徒など、芸術家の卵たちみたいなフンィキや、子どもの心の躍動が感じられました。

ハンブルグで領事御夫妻にお目にかかり、ドイツの教育についてお説をうかがうことができましたのを大そう幸せに思います。

ハンブルグは緑の美しい川と湖の街です。許可がなくては幹の直径二十センチ以上の木は切ってはいけないのだそうで、大戦中、燃料不足の時も切らせなかったとか。自然を守ることにも徹底していることを感じさせられました。日本の政治家も、私たちひとりひとりも、刻み込まなければいけない心なのだと思いました。

ドイツの幼稚園は皆、自由保育で、オープンプランなればこそ個々のこどもに即した教育が可能だし、すばらしい友情が育ちます。身体を大切にし、遊びを通してスピリット（融和の精神）を育て、人を助け、人には親切に、社会を批判することができる子どもに育てることを念願としているのです。娘は日本の幼稚園でドイツと同じ教育方針で育てられたことを喜びとし、誇りとしますと、目を輝かせて話して下さいました。

設備・人数・しつけ等をすぐ日本人は心配するけれど、それはおかしいと思います。日本の科学者は日本もドイツと同じ設備なら負けないと言うけれど、設備その他の条件も一人一人の知恵や努力であるとも言われました。ともすれば揺れ動きそうになる心にしっかりとくいを打っていただいたような思いでした。

教育関係で強く印象に残ったことを拾い、ここまで書き進みましたが、視察のあいまの旅のなぐさめも書き添えたいと思います。

何千年かの過去へさかのぼって自分を置いてみるような宮殿や教会の美しい建物、たくさんの名画や彫刻など、目を見はるようでした。

ローマの夜のカンツォーネ、ウィーンの森のオーケストラ……。

オリーブの林や羊のむれ、レマン湖の美しい水に浮ぶ白鳥のおやこ……。

ローマ、ナポリなど日本人観光客がたくさん集まるところでは、観光案内書や絵葉書を売る人たちが、カードのように扇形にひろげた品物を、ゆり動かしながら「シェンエン、シェンエン。サンカゲツ　ゲプ」(千円、千円、三ヵ月月賦)と言いながら寄ってせまってきます。その他、いろいろなお土産品購買意欲の物すごさ、日本人の義理堅さか。日本人観光客がお金を入れているところまで知っていて、口々にドマキ、ドマキ(胴巻)と言っています。ああ……。

何かを求めて歩む道、ローマへの道は、きびしくはるかです。カタコンベ(キリスト教徒迫害の激しかったころ、弾圧者の目を逃れた信徒たちがひそかに集まり信仰を語り合ったという地下の墓洞)では、地下にもぐってまで固い信仰を守った古の信徒たちの心をしのびました。それから田舎道をローマへ、ローマへと歩いていくうちに小さな教会をみつけました。

「ドミネ・クォ・バディス?　主よ、いずこへ」とペテロが問えば、主は「われ再び十字架につかんだがために、ローマへ」と答えられたと伝えられるクォ・バディスの寺で祈りをささげたひととき……。

自分の心の弱さをむち打たれたペテロが、迫害の待ち受けるローマへ帰るその心は?

旅を終えて、人の世の旅を思う。

自分自身の生きる道は?

〝心おどる泥んこ幼稚園、そして、心をこめて、宝の子、喜びの子ら(心身障害児)を含めた保育を〟と、そっと自分の胸に言い聞かせ、自らの教えとしたいと思います。

(鎌倉市聖路加幼稚園)